

「インドの発展と変化から日本の問題を考える」

宮原 豊(9組)

7月1日から公益財団法人日印協会に事務局長として勤務しております。ジェトロ時代にニューデリー事務所長を経験した縁です。

さて、6月末に訪問した南インド3都市紀行文を日印協会の機関誌「月刊インド」に掲載しました。それを一読した畏友・櫻田喜貢穂君(7組)は、「豊君、文章はよく書けているのかもしれないが、面白くないね。何か足りないなあ」と鋭い感想。さすが弁護士、痛いところを突かれました。

友好協会の機関誌にその事務局長が書けることは限度があります。

紙数の制限もあり、発展と変化の陰の部分、あるいは旧態依然とした社会の暗闇は書いていません。インドは物質面での進歩は著しいが、男尊女卑、カースト差別、政治家の腐敗・責任逃れ等、人々の意識は相変わらずで、社会問題は旧態依然としています。

今回、私は道路、鉄道、都市交通、港湾、工業団地等々のインフラ整備が劇的に進み大きな発展を遂げているものの、外見の変化では見えないインド人の経済生活の変化を書きたいと思いました。それは2000年代の中頃から、社会的に「信用調査」が定着し、「与信」が機能することによって中間層に自動車ローンやクレジットカードが普及し、インド人の消費活動に大きな変化が現れているということです。大型のショッピングセンターが登場したのもその頃で、大手の財閥系産業資本も小売・流通業に参入してきました。

これは昔のインドやインド人を知っている人から見ると大変化であります。

日本の高度成長期のことを思い出してください。我々が大学を卒業、就職した1970年代のことです。就職してクレジットカードを保有、アパートにテレビ、洗濯機、炊飯器、掃除機を揃え(結婚し子供が生まれ)、そのうち80年代には住宅金融公庫や銀行のローンでマイホームを手に入れ、そして車もローンで買いました。

ところがバブルが弾けて20年も経ってみるとどうでしょう、我々に何が残ったのでしょうか。そして、なかなか経済復興しない今の日本に残されたものは何でしょう。少子高齢化と破綻しつつある年金問題、若年層の失業問題、非正規雇用、衰退一途の農業・林業問題、エネルギー問題(原発も含め)等々と将来に明るい話はあまりありません。我々世代は、日本が昔からの問題を解決しようとして急成長を遂げ、結果として新たな社会問題を引き起こしてきたことを経験してきた生き証人です。だから、インドはインドの方法で解決していくことを見守りたいと思います。

今インドでは中間層の比率が徐々に増えてきています。それは1960年代~70年代の日本に似ていなくもないです。

12億人の上位3割が中間層以上、7割が下層に属するとすると考えられますが、中間層が

徐々に厚みを増しています。ただ、下層の下の数億人は底に沈殿したままです。

さて、インドの場合は何千年もの長い歴史のある根深い社会問題がおいそれと解決するわけではないです。最大の問題は初等教育です。一部の高等教育は圧倒的に高いレベルに達しているのに、農村や都市貧困層が基礎教育も十分に受けられない、従って初等教育全般が低レベルに止まっています。現モディ政権の掲げる「Make in India」の目的は農村や貧困層に初等教育のレベルアップを図ることにあるのかもしれませんが。差別問題や貧富の格差も時間をかけて少しずつ解決していくしかないと思います。

今後 10 年経って、また経済規模は 2~3 倍になるのでしょうか。しかし、その時になってもインドの社会問題は到底解決しているわけもなく時間をかけてゆっくりと変わっていくのだと思います。急な高度成長は新たな社会的矛盾を生じるとして、インド政府はあえて 7~8%成長を目標にしているのは賢明です。

(2015 年 7 月 31 日)

【次ページ写真説明】

- 1) ムンバイのガンジー記念館を再訪
- 2) コーチンで友人デービス夫妻と
- 3) チェンナイで友人スリラム氏と



1) ムンバイのガンジー記念館を再訪



2) コーチンで友人デービス夫妻と



3) チェンナイで友人スリラム氏と